

日本語教育実践研究（7）

難読語の指導—常用漢字音訓表付表より—

魏 之濤・費 騰・朱 金月・夏 俊・柴野 たまの

【キーワード】

漢字 ・ 難読語 ・ 熟字訓 ・ あて字

1. はじめに

「同じ漢字だから易しいだろう、と思うのは大きな間違いだ」とはよく言われるが、漢字指導7-8クラスの受講生に漢字圏学習者が多い。同じように見える漢字だからこそ、母語の漢字の知識が邪魔しての誤りもある。

日本語の漢字表記の読みには、「音」と「訓」があり、その組み合わせが漢字2字以上の語には関わってくる。二字熟語の場合を例に挙げると、字音読み（音+音）・字訓読み（訓+訓）・重箱読み（音+訓）・湯桶読み（訓+音）がある。しかし、日本語の漢字表記の読みはこれだけではない。音訓表では対応できない、「熟字訓」や「あて字」¹、いわゆる難読語がある。「どうしてこの漢字はこう読むのか」という学習者の質問に「覚えるしかない」と答えた経験はないだろうか。そんな答えを予想したら、学習者は何も聞かないだろう。学習レベルに応じたアドバイスやコメントは出来るようにしたい。

本稿では、漢字圏学習者にとっても難解な読みを「常用漢字音訓表付表」に焦点を当て、視点を変えて分析し、「漢字指導」の授業で効果的に取り扱う方法を考えていきたい。

2. 熟字訓とあて字

「訓」というのは本来字義を解釈することであるが、日本語においては特に中国から来た漢字を和語に当てて読むことである。それは、「呉音」「漢音」などの「音」あるいは「漢字音」に対して呼ぶものである。熟字訓は、漢熟字すなわち中国から伝来した漢語を和語に当てて読んだものではない。したがって、熟字訓は本来「訓」の類ではない。また、

¹ 「あて字という用語は、一般語として多義的に使われるため、その定義は専門辞書でも広義・狭義に分けてとらえることが多い。」木村義之（2005:81）

日本語の中には、「漢字本来の意味ではなく、日本語に対して同一又は類似の意味の字を当てた」（佐藤ほか1996：72）ものがある。それらはあて字と呼ばれている。

熟字訓とあて字の関係に関しては、杉本（1998）や竹浪（1987）や木村（2005）などの諸説がある。杉本（1987）では、「宛字」は「宛字A表語意的」と「宛字B表語音的」に分け、熟字法（熟字訓）はその「宛字A表語意的」の一分類であると述べている（図1参考）。

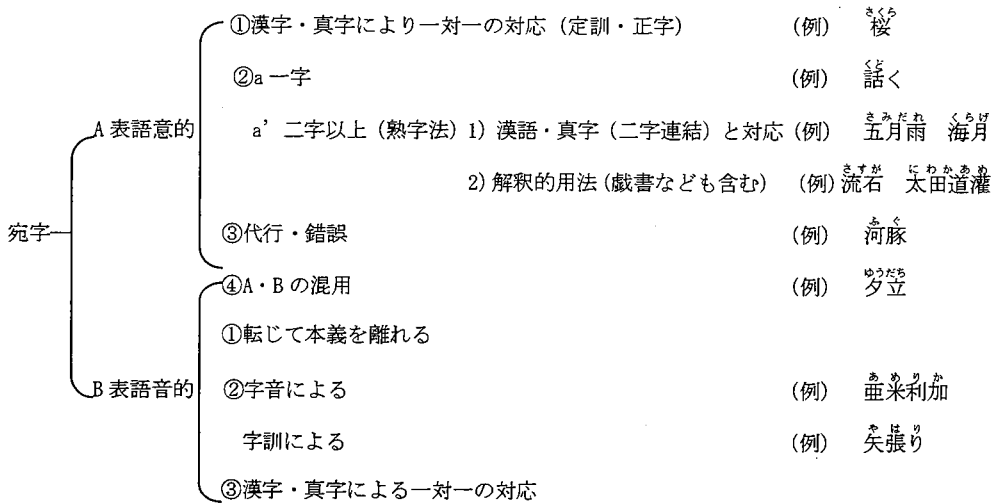


図1. あて字の分類（杉本1998：312-313より）

竹浪（1978）では、術語としての熟字訓の流れを調べ、「いまだ学術用語として公認され、定着してはいないようにも見えるが、この25年の間に公知のものとなりつつあるかのようでもある」（竹浪1978：300）としている。また、典型的な熟字訓として

明日（あす） 飛鳥（あすか） 山下風（あらし） 田舎（いなか）

蝸牛（かたつむり） 昨日（きのう） 五月雨（さみだれ） 相撲（すもう）

などを挙げている。

木村（2005）では、杉本（1998）のあて字に対する分類を引用し、宛字 A②a' の「熟字法」が現在熟字訓と呼ばれるものと同義であろうとしている。さらに、この熟字訓に相当するものを、漢語・真字（二字連結）と対応するもの（例：海月、水母、白雨、風流）、解釈的用法であるもの（戯書なども含む）（例：流石、太田道灌、恋水）に二分している。

本稿では、熟字訓であれあて字であれ、それらをすべて日本語教育における難読語として扱う。つまり、漢字の表記と日本語の読みとの関係、ここでは特に慣用読みをどのよ

うに扱うかについて考えていきたい。

2-1. 難読語としての熟字訓の分類

本稿では、「常用漢字音訓表付表」に掲げられた語を、中国語との関係から三分類する。

以下に表でまとめる。

分類	語例
①中国語にないもの	風邪、芝生、名残、…
②中国語と似ているもの	清水、土産、吹雪、…
③中国語と漢字表記が同じで意味が近いもの	乳母、七夕、紅葉、…

①②③については、①は中国語にないもの、②は中国語圏学習者が表記から類推できる熟字訓、③は日中同形語の熟字訓としてそれぞれについて述べる。

2-2. 中国語にないもの

2-2-1. 中国語にない語

熟字訓には、「果物」・「今朝」・「名残」・「野良」などのように、漢語から直接に熟語の漢字を借りたわけではなく、いくつかの漢字でオリジナルに作り上げられたものがある。これらの熟字訓の読みには音読みの存在は非常に少ない。

高見沢（1997）によると「「字訓」とは日本固有の言葉と中国語である漢字の意味が結び付いたとき、漢字に日本固有の言葉の発音を当てたものを字訓、また訓読みと言う」。例えば、「山」を「やま」とする漢語の意味と同等の意味の和語読みの「正訓」、漢語の本来の意味から発展させて、「父母」を「おや」にする「義訓」がある。表の①の熟字訓はほとんど「義訓」で、その読みは多種多様である。表の③の「叔父」（おじ）や「稚児」（ちご）のような中国語と表記が同じ熟字訓に対して、「風邪」（かぜ）や「芝生」（しばふ）のような熟字訓は中国語圏の学習者にも意味の理解は困難である。

2-2-2. 「国字」について

日本で作られたものに「国字」がある。「国字」というのは和製の漢字である。「国字」は熟語と違い、一文字である。和語を漢字で書くのに、対応する漢字がないために作られ

たもので、2つ以上の文字を組み合わせて、両方の意味をあわせもつ新しい字になっている。国字には「峠（とうげ）辻（つじ）榊（さかき）凧（なぎ）」などがあり、また「鮪（まぐろ）、鰯（いわし）、鰹（かつお）」など、魚の名前には国字が多く見られる。

それほど多くはないが、「働（どう）」、「腺（せん）」のような中国へ逆に輸出された国字もある。これらの国字は「音読み」をするものも見られる。その他、日本で作られた熟語には、三味線（しゃみせん）、伝馬船（てんません）、波止場（はとば）、八百屋（やおや）、一言居士（いちげんこじ）のように、3文字や4文字の熟字訓もある。

その他に中国語と同じ形をしているが意味が違う漢字もある。例えば「猪」と書いて、意味は山野に生息する豚の原種であるが、中国語では普通のブタという意味で、いわゆる日中同形異義語である。中国語圏の学習者にとっては間違いやすいものである。

2-2-3. 「名前」の熟字訓の分類

名前の読み方については規制がない。例えば、「一郎」と書いて「じろう」と読ませてもよいし、「秋子」と書いて「はるこ」と読ませてもよいということである。そのような特殊な読み方は紛れもなく熟字訓になるが、いかに分類するかは未だに不明である。が、総合的に考えると、意味と読みは元の漢字と違うという点から表の①の熟字訓に入れてもよいであろう。

このような日本で作られた熟語は日本語学習者にとって、読み方はいうまでもなく、他の熟語と違って、意味を理解することさえ困難である。中国語圏の学習者が漢語の形と似ている熟語を間違っして認識してしまうケースもある。日本で作られた語の熟字訓は、非常に習得しにくいものであるといえよう。

2-3. 表記から意味が類推できる熟字訓

日本で作られた熟語の中には、使われている漢字の意味から、また、表記が母語に似ているため意味を類推しやすいものもある。漢字圏学習者には、理解しやすいのではないだろうか。しかし、漢字圏学習者と非漢字圏学習者を分けている教育現場は少ない。漢字圏、非漢字圏を区別する事とは別に、漢字のルーツは中国であり、中国の漢字との違いを知りたいという学習者も少なくない。本来の漢字の意味と比較しての授業進行も漢字への興味

を持たせることになるであろう。

和製熟語で中国語と1字重なり、意味が近いものを付表から抜粋すると、「清水(日)・泉水(中)」、「砂利(日)・砂石(中)」、「土産(日)・特産(中)」、「吹雪(日)・暴風雪(中)」などがある。表記から理解の助けにはなるが、漢字圏の学習者でも、その読みには苦勞する。難読語の読みに関しては、漢字圏、非漢字圏学習者の条件はあまり変わらない。日本語の漢字表記は中国語の漢字とは異なるという認識のもとで、「漢字教育」を考えなければならぬが、違うということばかりでなく、学習者の母語に共通している点を利用する案もある。

例えば、「その土地の特産を、お土産(みやげ)にすると喜ばれます」、「旅の恥は掻き捨て、この足袋は履き捨て」、「春の息吹(いぶき)と桜吹雪(ふぶき)」等、母語に結びつけたものや、言葉遊びのような例文を作るなど、覚えなければならぬものなら覚えやすいように、表記から意味が類推できるものやずれが大きいもの、成り立ちによる違いなど、さまざまな視点から分類し、理解を助ける工夫等、漢字教育指導に有効利用する方法を考えていきたい。

2-4. 日中同形語の熟字訓

熟字訓の読みが難しい理由の1つは、表記としての漢字それぞれの読みから全体の読みを推測することができないというところにあると考えられる。さらに、中国語圏の学習者は無意識に漢字それぞれの音読みで読んでしまうケースが多い。中国語と同形の熟字訓ならその意味はすぐ理解できるので、日中同形語の熟字訓については、その読み方を軽視する傾向がある。「常用漢字音訓表付表」にある日中同形語を以下に挙げる。【 】内は中国語の出典である。

小豆【本草】 海女【張説碑文】 乳母【荀子】 叔父・伯父【尔雅・釈名】
 大人【史記】 叔母・伯母【尔雅・礼記】 昨日【史記】 今日【礼記】
 今年【韓愈】 七夕【庾肩吾詩】 一日・朔日【書経・詩経】 祝詞【唐楽章】
 明日【左氏伝】 二十【周礼】 紅葉【尚書】 時雨【書経】 五月雨【続博物志】
 (佐藤ほか 1996 による)

梅雨 草履 雪崩 河岸 蚊帳 博士 二十日 二日

以上は出典が不明であるが中国語から伝来したと判断できそうなものである。

日中同形といっても日本語と中国語の意味も同じであるというわけではない。たとえば、

「河岸（かし）」は「①かわぎし②魚河岸の略、魚市場」という意味があり（小林 2006）、
「国語に特有の読み・意味」としている。したがって、“河岸”という漢字には、「かわ
ぎし」と「かし」のように、2つの読みがあり、その中の「かし」という読みが慣用として
独特の意味を持っているということである。

一方、表記のゆれで変わっているものもある。たとえば、「雪崩（なだれ）」という語
は、昔「雪類」と書かれたこともあった（佐藤ほか 1996）。この例からわかるように、日
中同形語で特に出典の不明なものは、中国から日本へ、または日本から中国へ伝わったの
か、その歴史的な経緯が明確ではないので、ここでは触れないことにする。ただし、上記
のような日中同形語は、その構成する漢字の意味は明確であると言えよう。この点でそれ
らはあて字の類に属さないように思われる。

3. 二通り読みのある熟語

「祝詞、博士、二十歳、紅葉、猛者、眼鏡、下手、明日、浴衣、七夕」などの熟字訓に
は「熟字訓読み」と「音読み」との二通りの読み方があり、読みによって、意味が違って
くることが多い。『広辞苑』第五版を用いてこれらの語彙の意味用法を調べ、読み方による
意味・用法の違いをまとめた。

*紅葉	<p>熟字訓読み「もみじ」</p> <p>意味： ①秋に、木の葉が赤や黄色に色づくこと。また、その葉。②カエデの別称。③「もみじば」の略。④襲（かさね）の色目。⑤（鹿にはもみじが取り合されるところから）鹿の肉。「紅葉鍋」⑥麦のふすま。もみじご。⑦茶を濃く味よくたてること。</p> <p>用例：「紅葉（もみじ）のような手」</p>
	<p>音読み「こうよう」</p> <p>意味： 秋に葉が紅色に変ること。また、その葉。細胞の液胞中のアントシアニンが増し、葉緑素が分解するためにおこる。カエデ・ウルシの葉で著明。もみじ。</p> <p>用例：「全山紅葉する」</p>

博士	<p>熟字訓読み「はかせ」</p> <p>意味：①学問またはその道に広く通じた人。ものしり。学者。②律令時代の官名。③明治初年大学生の教授、洋書の翻訳、疾病の治療をつかさどった奏任官。④学位としての博士（はくし）の俗称。⑤声明・催馬楽（さいばら）・朗詠（ろうえい）などで用いる線形の譜。</p> <p>用例：「お天気博士」「鉄道博士」</p>
	<p>音読み「はくし」</p> <p>意味：自立的な研究能力と学識とを有する者に授与される学位。</p> <p>用例：「彼女は博士課程を修了しました」</p>
明日	<p>熟字訓読み「あす」「あした」</p> <p>意味：夜が終わって、明るくなった時。あさ。</p> <p>用例：「明日の露」「明日は明日の風が吹く」「明日に道を聞かば夕べに死すとも可なり」</p>
	<p>音読み「みょうにち」</p> <p>意味：今日の次の日。</p>
眼鏡	<p>熟字訓読み「めがね」</p> <p>意味：①不完全な視力を調整したり、強い光線を防ぐために、目につけるレンズや色ガラスなどを用いた器具。②物を見て、善悪などを見分けること。また、その力。③望遠鏡。とおめがね。</p> <p>用例：「教授の眼鏡にかなう」「眼鏡が狂う」</p>
	<p>音読み「がんきょう」</p> <p>意味：めがね。</p>

上記の例では、熟字訓として使う時も、音読みで読んで使う時の意味を含んでいるが、同じ表記であっても、読みにより全く意味が違う例もある：

下手	<p>熟字訓読み①「へた」</p> <p>意味：①物事に巧みでないこと。まずいこと。不器用なこと。②なまじっかなこと。いいかげんなこと。</p> <p>用例：「下手に口を出さない方がいい」「下手な図書館より本がある」「下手すると命が危ない」</p>
	<p>熟字訓読み②「したて」「したで」</p> <p>意味：①下の方、しもて。②他より低い地位。またその地位になる人。③相撲で、組んで相手の差し手の下から回しを取る。またその手。④犬追物で自分の馬の後に立った射手。</p> <p>用例：「下手に出る」「下手（したて）投げ」</p>
	<p>熟字訓読み③「しもて」</p> <p>意味：下（しも）の方。①（川の）下流。②芝居の舞台の、見物席から見て左の方。③魚網の右の網。⇔上手（かみて）</p> <p>用例：「この川の下手に大きな橋がある」</p>

このように、「下手」には複数の熟字訓があり、読み方によって意味が変わる。このような例は学習者が注意すべきものである。

4. 音韻上の変化のある語

初めて「読経（どきょう）」「寄席（よせ）」「真っ赤（まっか）」「素人（しろうと）」を見たとき、「どくきょう」「よせせき」「まあか」「すひと」と読む人は少なくないと思う。このように、難読語の中には、「音韻上の変化」によるものがある。

「音韻上の変化」の代表的なものに「音便」がある。「音便」とは、国語学の用語で、発音上の便宜から、もとの音とは違った音に変わる現象をいう。一般に、イ音便、ウ音便、撥音便、促音便の四種がある。「常用漢字音訓表付表」110語の中から、「音韻の変化」による難読語を集め、語源を調べ、それらを分類してみた。

4-1. 語中の「ひ」「び」音の長音化

「素人」は前田（2005）によると、「シロヒトの音便形で、ある物事に経験のない人、そのことを職業にしないひと」という。語中の「ひ」の音が長音化して、「しろうと」になったわけである。このように、音の長音化に類推できるものには、「仲人」と「若人」がある。

「仲人」は「なかびと」→「なこうど」に変化し、「若人」は「わかびと」→「わこうど」

に変化したものと見られる。付表以外では「玄人（くろうと）」もこれと同じ変化であると思われる。

4-2. 音の脱落

「木綿」を初めて見たとき、「もくめん」と読む学習者があるだろう。確かに、「もめん」は「もくめん」の変化した形で、綿の種子についている白くて柔らかな綿毛を表している。

「木綿」以外にも、「白髪」「しらかみ」→「しらが」、「迷子」「まよいご」→「まいご」、「読経」「どくきょう」→「どきょう」、「寄席」「よせせき」→「よせ」などがある。

4-3. 促音化

「促音化」とは、発音の便宜のため、語中で、ある音が促音に転ずる現象である。「真っ赤」「真っ青」はこのグループである。「真っ赤」は「まあか」から変化してできた語であり、「真っ青」は「まさあお」か「まあお」から変化してできた語と見られる。

4-4. その他

「硫黄」は前田（2005）によると、「硫」の字音「る」を日本化して「ゆ」と発音した「ゆわう」が「いおう」に変化したそうである。「投網」は、中国語の発音「たうあみ」が「とあみ」に変化してできた語ということである。

「常用漢字音訓表付表」にない、音韻上の変化のあるものの例を以下に挙げる。漢字教育の中で、音韻上の変化のある熟字訓は間違いやすい部分であり、注意すべきところである。

木立（こだち）	目深（まぶか）	金物（かなもの）	雨戸（あまど）
春雨（はるさめ）	何時（なんどき/いつ）	合併（がっぺい）	天皇（てんのう）
夫婦（ふうふ）	格子（こうし）	手綱（たづな）	音頭（おんど）
順応（じゅんのう）	因縁（いんねん）	詩歌（しいか）	

5. 終わりに

本稿では「常用漢字音訓表付表」から難読語を、中国語との関係・読みの種類・音韻上の変化などの視点にたって、分類し考察した。今後は難読語を漢字教育で、どう取り扱っていくかである。2-3でも述べたように、結びつけた例文を作るなど、覚える工夫もある。しかし、意味用法がずれる場合もあり、安易にはできない。また、学習者の背景は多様である。漢字指導7-8クラスでは、学習初日に学習者から選択動機等のアンケートをとっている。今期は「新聞を読めるようになりたい」を始め、「漢字の由来」や「国字」、「日本語

の漢字と中国の漢字の区別」などを知りたいという声があった。学習者のいろいろな興味に対応できるように、視点を変えて練習問題を作成するのも一案だ。

例えば、3.「二通りの読みのある熟語」で取り上げたように、それぞれの読みに当てはまる例文での読みの比較練習や、4.「音韻上の変化のある語」を中心にした授業を組むなど、内容に興味を持てるようなクラス運営を考えていかなければならない。これは、難読語に限ったことではない。そのためにも、日本語教育に従事するものとして、普段からいろいろな角度で漢字語彙を捉える訓練が必要である。漢字抜きでの日本語はありえない。学習者が漢字教育を受け、日本語の能力がつくことを実感し、興味ある内容で面白いと漢字学習を楽しめるように工夫していきたい。

参考文献

- 木村義之（2005）「あて字」『朝倉漢字講座 1 漢字と日本語』朝倉書店 pp. 80-125
- 金田一京助（1997）『新明解国語辞典』第五版 三省堂
- 小林信明編（2006）『新選漢和辞典』（第七版）小学館
- 佐藤喜代治（1987）『講座 漢字と日本語』明治書院
- 佐藤喜代治ほか（編著）（1996）『漢字百科大事典』明治書院
- 杉本つとむ（1986）『読む日本漢字百科』雄山閣
- 杉本つとむ（1987）『「宛字」の語源辞典』日本実業出版社
- 杉本つとむ（編）（1993）「《あて字》概説」『あて字用例辞典』雄山閣出版
- 杉本つとむ（1998）「第九章 宛字の論」『杉本つとむ著作選集 5 日本文学史の研究』八坂書房 pp. 293—349
- 高見沢孟（1997）『はじめての日本語教育 基本用語事典』凡人社 pp. 131-133
- 竹浪聰（1987）「熟字訓」『漢字講座 3 漢字と日本語』明治書院 pp. 295-308
- 新村出編（1998）『広辞苑（第五版）』岩波書店
- 前田富祺（2005）『日本語源大辞典』小学館

ギ シトウ・修士課程 1 年
ヒ トウ・修士課程 1 年
シュ キンゲツ・修士課程 1 年
カ シュン・修士課程 1 年
シバノ タマノ・修士課程 2 年